

[D年] 復活日(2024年3月31日)**【前夜・旧約聖書日課】 出エジプト記14章15～22節**

15主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出発させなさい。16杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。17しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼らはお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。18わたしがファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」

19イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろをいき、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、20エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。21モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。22イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。

【前夜・使徒書日課】**ローマの信徒への手紙6章3～11節**

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わ

たしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【日中・旧約聖書日課】 イザヤ書55章1～11節

- 1 渇きを覚えている者は皆、
水のところに来るがよい。
銀を持たない者も来るがよい。
穀物を求めて、食べよ。
来て、銀を払うことなく穀物を求め
価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。
- 2 なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い
飢えを満たさぬもののために労するのか。
わたしに聞き従えば
良いものを食べることができる。
あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。
- 3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。
聞き従って、魂に命を得よ。
わたしはあなたたちとどこしえの契約を結ぶ。
ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。
- 4 見よ
かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし
諸国民の指導者、統治者とした。
- 5 今、あなたは知らなかった国に呼びかける。
あなたを知らなかった国は
あなたのもとに馳せ参じるであろう。
あなたの神である主
あなたに輝きを与えられる
イスラエルの聖なる神のゆえに。
- 6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。
呼び求めよ、近くにいますうちに。
- 7 神に逆らう者はその道を離れ
悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば

豊かに赦してくださる。

8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
わたしの道はあなたたちの道と異なると
主は言われる。

9 天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。

10 雨も雪も、ひとたび天から降れば
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ
種蒔く人には種を与え
食べる人には糧を与える。

11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も
むなしくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ
わたしが与えた使命を必ず果たす。

【日中・使徒書日課】

コリントの信徒への手紙一5章6～8節

6あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。7いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。8だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いなくて、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。

【日中・福音書日課】

ヨハネによる福音書 20章1～18節

1週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。2そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」3そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。4二人は一緒に走ったが、もう一人

の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。5身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。8それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。9イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10それから、この弟子たちは家に帰って行った。

11マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、12イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。13天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」14こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。15イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」16イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。17イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行つて、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」18マグダラのマリアは弟子たちのところへ行つて、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月31日「復活日(イースター)」の日課主題は「キリストの復活」。

・「復活日」の記念は、伝統的に「復活日前夜」の「復活徹夜祭」から始められ、復活日の早朝、日中と祝いの礼拝(ミサ)が執り行われてきた。教団聖書日課も、この伝統を踏まえて、「復活日」の主日聖書日課として、「前夜または早朝」の日課と「日中」の日課を定めている。特に「復活祭」の洗礼式は、「前夜」の枠組みの中で執り行われてきた。石神井教会では、通常の「主日礼拝」を「復活祭礼拝」に振り替えるため、二組の日課を組み合わせる礼拝の聖書朗読としている。ここでは、「前夜または早朝」の「福音書日課」を除く5つの主日聖書日課を取り上げる。

・前夜の旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、モーセ物語の渡海の出来事を物語る説話の一部箇所。前夜の使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、洗礼についての教えの箇所。日中の旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、神の言葉の実現を告げる預言の箇所。日中の使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、パン種のたとえから新たな「過越祭」の祝いを勧める箇所。日中の福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、マリアへの復活顕現の逸話箇所。

前夜・旧約(出エジプト 14章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第二巻。「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一部を構成する。日課箇所は、神の召命によってエジプトに寄留する民を連れ出し、ファラオの軍隊の追走を振り切って海を渡っていくことを描く「渡海の出来事の説話」の一部。

・「モーセ物語」は、ユダヤ教で記念される三大祭に対応して、三つの大きな枠組みが置かれていると推認される。すなわち、「過越祭」によって記念される「出エジプトの出来事」、「七週祭」によって記念される「シナイ山での律法授与」、「仮庵祭」によって記念される「荒れ野の出来事」である。これら三つは、それぞれに異なる神学的意義を提示しており、「過越祭」は「神の一方的選びによる民の救済」、「七週祭」は「神の律法授与に基づく《神の民》契約」、「仮庵祭」は「律法実践に拠る民の聖化」を神学的主題としていると整理できる。日課箇所「渡海の出来事」は、「過越祭」によって記念される「出エジプトの出来事」の中の説話の一つであり、「神の一方的選びによる民の救済」を基底の神学としている。

・「渡海の出来事」は、「過越」によるエジプト脱出と共に、民の信仰や意志とは無関係に、神が民を導き出されたという、「恵みによる選び」に基づく「救済」である。この恵みに基づく救済神学は、新約における救済論の土台であり、それゆえに「洗礼」の予型の一つとして「渡海の出来事」が解されてきた(1コリ 10:2 等)。

前夜・使徒書(ローマ 6章)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが、未訪のローマの教会共同体に宛てて、訪問計画を伝え、またその後のエスパニア伝道計画への協力を求めるために記した。パウロは、コリント伝道を通して、ユダヤ人夫妻アキラとプリスキラをはじめとするローマの教会共同体メンバーと交流を持ち、彼ら一部のメンバーとはコリントの教会形成を通して一定の協力関係を築いていたと考えられる。ただし、コリント教会では、多様な系譜の信者が入り乱れており、誰もがパウロを指導者として認めていたわけではなく、コリントを離れたパウロと教会メンバーの間には、彼の支持者を間に挟んで、さまざまな行き違いが生じていた。パウロは、ローマ訪問を前に、コリントの事情を知るローマのメンバーに、自分の立場を明確に伝えておく必要があると考え、この書簡で丁寧に展開させている。

・日課箇所に取り上げられている「洗礼」に関する理解を、パウロは「ガラテヤの信徒への手紙」3:26 以下でも取り上げており、基本的な発想は変わっていないとみられる。ただし、本書簡が「洗礼」を「キリストの死と復活」にあずからせるものであると明確に示しているのに対して、「ガラテヤ書」は明確でない。パウロは、旧約律法(モーセ物語)が基本的枠組みとしている「救済～契約～聖化」という神学構成を継承していると考えられるが、「ガラテヤ書」ではもっぱら「救済」に焦点が当てられることによって「契約」に関する議論が終始してしまっているのに対して、「ローマ書」では、丁寧に「聖化」までを見通した議論を展開しており、「洗礼」も「救済」論的、「契約」論的な側面と共に「聖化」論的な意義づけを丁寧に提示していると言える。

日中・旧約日課(イザヤ 55章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一巻。前8世紀末の南王国ユダで宮廷預言者として活動した「イザヤ」の「預言と活動の記録」を素地とした1～39章と、前6世紀にバビロン捕囚から解放されてペルシア支配下でユダヤ共同体再興事業に参加した者たちの内、「イザヤ」を「預言者の模範」とする祭司・預言者らにより意図的に加筆された40章以下とに分けられる。通例、後者は「第二イザヤ」と呼ばれる。

・日課箇所は、「第二イザヤ」前半(40～55章)の終結部。「第二イザヤ」すなわち歴史的預言者である「イザヤ」を模範として「ユダヤ宗教共同体」を構築することを目指していた祭司・預言者集団に属する者が、その神学思想の根幹にしたと思われる「神の言葉の神学」を提示している。

・「第二イザヤ」は、42～53章で「主の僕の苦難」を描いている。「神の言葉の神学」は、「主の僕」として苦難を引き受けた者に対する希望として組み立てられており、この観点を脱落させると誤解を生じさせる。

日中・使徒書日課(I コリント 5 章)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。上述のパウロが参与したコリント伝道によって創設・形成された教会共同体に宛てて、パウロが教会運営上の助言や意見を述べている。本書簡で取り上げられている教会で生じていた問題は、おそらくパウロの支持者らによって伝えられた事柄であったと考えられ、パウロは自身をコリント教会の指導者の一人と自負して、本書簡を記している。このような態度は、後の彼の行動も相まって、コリント教会のメンバーに誤解や不信を生じさせた。

・日課箇所直前で、パウロは、不道徳な人々との交際を避けるべきことを勧めている(5:1~5)。そこで述べられているような不貞行為が実際に行われていたことなのか、噂話程度の話なのか、判断としないが、彼は、実際に起こったこととして取り上げ、毅然とした態度を取るべきことを強く求めている。パウロは、その理由として、過ちを犯した者が「主の日に…救われるため」(5節)と説明し、その者に毅然とした態度を示さない教会メンバーを「誇っている」、つまり高慢だと批判しているが、これは、後にパウロとコリント教会メンバーとの間の関係を悪化させる一つの要因になった発言と推認される。パウロの「純粋(エイリクリネイア=誠実)」(8節)を求める警告は、パウロに「不寛容」のレッテルを貼ることになったからである。

・パウロはここで、「キリスト」が「わたしたちの過越の小羊として屠られた」と述べているが、これはおそらく、初期教会が共有していたキリストの死(十字架)に関する神学的理解に基づく。「過越祭」の最中に起こったキリストの十字架死は、「新しい過越のための犠牲の小羊」が屠られた出来事と解された。この点をより厳密に再構成して「受難物語」を記しているのは、「ヨハネ福音書」である。

日中・福音書日課(ヨハネ 20 章より)

・日課箇所は、四福音書が共通して伝える「キリストの復活顕現伝承」のうちの「空の墓の発見の逸話」であるが、「ヨハネ」は独自の視点で細部を改変している。すなわち、他の福音書が、葬りから三日目の「週の初めの日」の朝に墓を訪れたのは「女性たち」であったとしているのに対して、「ヨハネ」は、「マグダラのマリア」だけを登場させ、他の者の存在を無視している。また、「空の墓」についての報告を受けた弟子たちのうち、ペトロが確認するために墓に向かったことは「ルカ」が伝えているが、「ヨハネ」では「もう一人の弟子」も一緒に墓に向かい、空の墓を確認したとしている。次いで、「空の墓」で女性に対して語りかける「天使」とのやり取りも、「ヨハネ」は、「マリア」一人のこととして描き、その延長線で「マリア」が復活されたイエスと対面したと描いている。まとめると、「ヨハネ」は、四福音書に共通する「空の墓の発見と復活顕現」の逸話を、「マグダラのマリア」の視点にもっぱら集中させている。

・「マグダラのマリア」については、四福音書が共通して、主イエスの十字架刑に立ち会い、また「空の墓」を発見した女性たちの一人として名を挙げている。「ルカ」だけは、ガリラヤ伝道中から同行していた女性の弟子たちの一人として伝えているが(ルカ 8:2)、他の福音書は、十字架の場面以前の彼女の動向を一切伝えていない。一部の古い伝承では、「ルカ」や「ヨハネ」が伝える「ラザロ」の姉妹である「マルタとマリア」の「マリア」と同一視されてきたが、それを否定する伝承もあり、通例は別の「マリア」として解されている。このような「マリア」にもかかわらず、四福音書が伝えているとおり、初期教会では「復活顕現」の第一の証言者として特別な扱いを受けていたと考えられる。

・日課箇所および以下に続く復活顕現伝承記事には、「見る」「分かる」等の動詞が頻繁に用いられている。これらの語は、ギリシア語本文では4種の動詞が使分けられている。その中で、18節「わたしは主を見ました」の用語「ホラオオ」は、他の福音書の復活顕現証言に関しても用いられている。2節、13節、14節「分かりません」は、8節「見て」と同じ語「エイドオ」の派生形で、この語は、続く復活顕現伝承記事でも多用されており、「復活顕現」の出来事を理解し説明するために「ヨハネ」が選んだ用語と考えられる。

来週の誕生日 (3月31日~4月6日)

。

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-331 番「主はよみがえられた」は、テゼ共同体の讚美で、フランスの作曲家ベルティエが作曲。テゼ共同体は、改革派牧師の子としてスイスに生まれ自ら牧師となったロジェ・シュッツ(ブラザー・ロジェ)が、1940年にフランス・テゼで超教派の「和解の共同体」を始め、ユダヤ人難民や孤児を匿ったことから始まった祈りの共同体(観想修道会に近い)。ベルティエは、パリ・聖イグナチオ教会オルガニストとしても活動する傍ら、1975年以降、テゼ共同体のために多くの讚美を作曲した。
- ・21-325 番「キリスト・イエスは」(= I 148「すくいぬしは」)は、原詞が14世紀のラテン語聖歌で、1708年発行英語讚美歌集『ダビデの堅琴』で英訳詞がこの曲と組み合わせられてから、代表的な英語イースター讚美歌として歌われてきた。
- ・21-69 番「神はそのひとり子を」(☞20番)は、現代オーストラリアのルター派讚美歌作家ロビン・マンの作詞作曲で、アジアキリスト教協議会編纂の「*Sound the Bamboo: CCA Hymnal 1990*」所収。
- ・21-79 番「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讚美讚美で、19世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。
- ・21-326 番「地よ声たかく」(= I 154)は、7~8世紀のギリシア正教会で活躍した代表的な神学者「ダマスコのイオアン(ヨハネ)」の作詞したカノン形式の詩によるギリシア語聖歌。曲は、19世紀英国の教会音楽家スマートの作曲。

21-331「主はよみがえられた」

Surrexit Dominus vere

Surrexit Dominus vere. / Alleluia, Alleluia, / Surrexit /
Christus hodie. / Alleluia, Alleluia.

21-325「キリスト・イエスは」

Surrexit Christus hodie(English Translation)

1. Christ the Lord is ris'n today, Alleluia! / Sons of men and
angels say, Alleluia! / Raise your joys and triumphs high,
Alleluia! / Sing, ye heav'ns, and earth reply, Alleluia!
2. Love's redeeming work is done, Alleluia! / Fought the fight,
the vict'ry won, Alleluia! / Jesus' agony is o'er, Alleluia! /
Darkness veils the earth no more, Alleluia!
3. Lives again our glorious King, Alleluia! / Where, O death, is
now thy sting? Alleluia! / Once he died our souls to save,
Alleluia! / Where thy victory, O grave? Alleluia!

21-69「神はそのひとり子を」

Father welcome all his children

Refrain: Father welcomes all his children / to his family through
his Son. / Father giving his salvation, / life forever has been
won.

1. Little children, come to me, / for my kingdom is of these; /
life and love I have to give, / mercy for your sin.
2. In the water, in the word, / in his promise be assured: / those
who are baptised and believe / shall be born again.
3. Let us daily die to sin, / let us daily rise with him — / walk
in the love of Christ our Lord, / live in the peace of God.

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.

Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the
rising sun, / O Lord, have mercy on me.

2. Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]

21-326「地よ、声たかく」

Αναστασεως ημεραEnglish translation

1. The day of resurrection! / Earth, tell it out abroad; / the
passover of gladness, / the passover of God. / From death
to life eternal, / from earth unto the sky, / our Christ hath
brought us over, / with hymns of victory.
2. Our hearts be pure from evil, / that we may see aright / the
Lord in rays eternal / of resurrection light; / and listening to
his accents, / may hear, so calm and plain, / his own "All
hail!" and, hearing, / may raise the victor strain.
3. Now let the heavens be joyful! / Let earth the song begin! /
Let the round world keep triumph, / and all that is therein! /
Let all things seen and unseen / their notes in gladness
blend, / for Christ the Lord hath risen, / our joy that hath no
end.